

## IV 調査成果のまとめ

### A 北面大垣の発見

今回の発掘調査によって、川原寺の寺域の北を限る大垣SA600を検出した。これによって従来不明であった寺域の南北規模が確定した。北面大垣SA600は、柱穴の掘形が一辺2m近く、柱痕跡も径35cmを測るなど、堂々たる規模の掘立柱塀である。しかしながらこれまでの調査では、東面、南面の寺域区画施設は築地塀であることが確認されており（『藤原概報4』『藤原概報25』）、北面大垣の構造がそれらとは異なることが明らかになった。この点に関しては、築地塀の構築時期が問題となるが、北面大垣を築地塀に改修した形跡がないことから、当初から伽藍の正面と飛鳥京に面した東面の区画施設を築地塀とした可能性がある。

### B 川原寺の寺域

発見した北面大垣と南面築地間の距離は約333mを測り、寺域が南北約3町の規模をもつことが判明した。これを四大寺の一つ飛鳥寺の寺域規模と比較してみよう。飛鳥寺の北面大垣と南門の心々距離は293mで、北面大垣から南方石敷広場までは324mを測る（『藤原概報8』）。また寺域の東西規模は、北で213m、南で約260mの台形を呈し、南東部が隅切となる寺域が復原されている。南北3町、東西2町半を基本とするものの、道路や水路などの既存施設や地形の制約により、不整形な寺域になったものと考えられる。

今回の調査によって、川原寺の寺域南北長が飛鳥寺とほぼ等しく、大寺にふさわしい規模をもつことが明らかになったが、寺域の東西規模や大垣の圍繞範囲についてはなお不明な点が多い。昭和58年の『史跡川原寺跡現況と保存管理』では、東西2町、南北2町以上の寺域を想定しているが、西面大垣は未確認であり、寺域の東西規模は推定の域を出ない。また今回検出した北面大垣も、これを西に延長すると直ちに丘陵とぶつかり、東に延長すると約40mほどで飛鳥川に達する。このため川原寺の寺域も地形に制約された不整形な形状をとらざるを得ない。同じ四大寺でも、藤原京内に占地する本薬師寺や大官大寺が、藤原京の条坊区画を基準に整然とした矩形の寺域をもつと考えられるのとは対照的であり、不整形な寺域は、狭小な飛鳥に所在する大寺の特徴といえよう。未確認の西面大垣の追求と、寺域のさらなる解明作業が今後の課題である。

### C 寺域北辺の遺構変遷

北面大垣に接する寺域北辺の遺構は、出土土器や層位関係を手がかりに、A期：川原寺造営期、B期：藤原宮期（飛鳥V）、C期：奈良時代前半期（平城土器Ⅲ）、D期：奈良時代末～平安時代初頭以降の4時期に区分することができる。

A期の遺構には、冶金関連の工房跡や瓦窯があり、丘陵裾の狭い空間を利用して、寺の造営に必要な資材の生産を行っている。B期になると、調査区の南部を中心に、整地によって丘陵裾の平坦面を拡張し、鉄釜鑄造土坑や調査区中央の冶金関連工房を営んでいる。C期には、大規模な整地によって一帯を整備し、双倉や大型建物を計画的に配置するなど、土地利用の様相が一変する。これらの建物はD期には廃絶し、D期になると再び冶金関連の工房が営まれるようになる。このように発見した遺構群は、長期にわたり複雑な変遷を遂げており、小規模な調査ではあったが、寺域北辺における空間利用の一端を解明することができた。

### D 主要遺構の性格

**冶金関連工房** 30基以上の冶金関係の炉跡が調査区全体に分布するが、それらはA・B・D期に分かれる。中でも調査区南部で、造営期の工房の構造を明らかにすることができた。工房は、丘陵裾部に雨水の浸入を防ぐ排水溝を開削し、そこから「コ」字形に分岐する小溝を設けて、作業空間を区画する。相次いで営まれた3単位の工房跡を検出したが、さらに工房区画は南北に連続すると予想される。最も残りの良い北区画は、南北約6m、東西4mの小規模なもので、テラス上に15基の炉跡が改修を繰り返しながら築炉されていた。工房テラスの東は、飛鳥川に向かって急激に落ち込み、工房から投棄された工房廃棄物（炭・灰等）が堆積する。工房区画溝やテラス上からは、鉄滓、銅滓、砥石、羽口、坩堝片などが出土し、この工房で鍛冶を主体に小規模な鑄銅作業を行ったことがわかる。

また造営時の工房は、調査区北部に広がる炭層の存在から、調査区西側の丘陵斜面にも存在することが推測される。丘陵斜面を利用した工房の立地は、先年調査した飛鳥池工房遺跡に類似し、鉄・銅・銀・ガラス・瓦・漆塗製品などの生産品目も共通する部分が多いが、その規模は比較にならぬほど小規模である。今後、両工房遺

跡の遺構や出土遺物の詳細な比較検討を通して、ほぼ同時期に営まれた飛鳥池工房の特殊性や、寺院付属工房の普遍性がより鮮明になるものと期待される。

**鉄釜鑄造遺構** 鑄造土坑SX599は、これまでに類例のない古代の鉄釜の鑄造遺構であり、大型鉄製品の鑄造遺構としても最古の資料である。鉄釜の鑄型が良好な状態で遺存し、従来不明であった古代の鉄釜の形状や、その製作技術を解明する上で貴重な資料が得られた。

鉄釜鑄型は口縁を下にした状態で土坑内に据えられ、外型と中子が組み合う幅木部分から、鑿にかけての外型が鑄造時の状況をとどめて遺存した。鑿部分の鑄型には、鑄型の重ね目の痕跡があり、鑿を境に尻型と口型の上下二段に分割されていたようである。また遺構の破損状況から、設置した鑄型の上半部（尻型）を壊し、梃子を使って製品を取り上げた状況を復原できた。取り上げ時に破壊された鑄型が土坑内に散乱するが、その分布状況や土層断面から判断すると、鉄釜の搬出を容易にするために、土坑を皿状に埋め戻してから、取り上げ作業を行ったよ

うである。

鑄造遺構の基礎構造は、梵鐘の鑄造遺構に通有の定盤と掛木の存在を想定して調査したが、それらの痕跡は認められず、特異な基礎構造をもつことが判明した。設置した鑄型の乾燥時に、中子の内部から鑄型を焼成した火床とみられる窪みと、そこから十字に派生する溝状の窪み、溝の先端に配置された小土坑を検出した。これらの施設については類例がなく機能や性格を特定できないが、鑄型焼成時の送風、もしくは鉄釜鑄造時のガス抜きに関係した施設と考えている。溝状の窪みを灰色粘土で埋めた後に、環状に青灰色の粘土を置いてジョウを形成し、その上に鑄型を設置する。掛木や締木の痕跡の欠如は、鑄型の周囲に堆積する白色粘土がその代用を果たした可能性が高く、鑄型を白色粘土で厚く被覆して固定したと考えられる。

**鑄造された鉄釜** 残存する鑄型から復原した鉄釜の形状は、短く直立した口縁部と球状の体部をもつ口径88cmの「羽釜」で、肩部に幅8cm、厚さ約2cmの鑿がつく。胴部

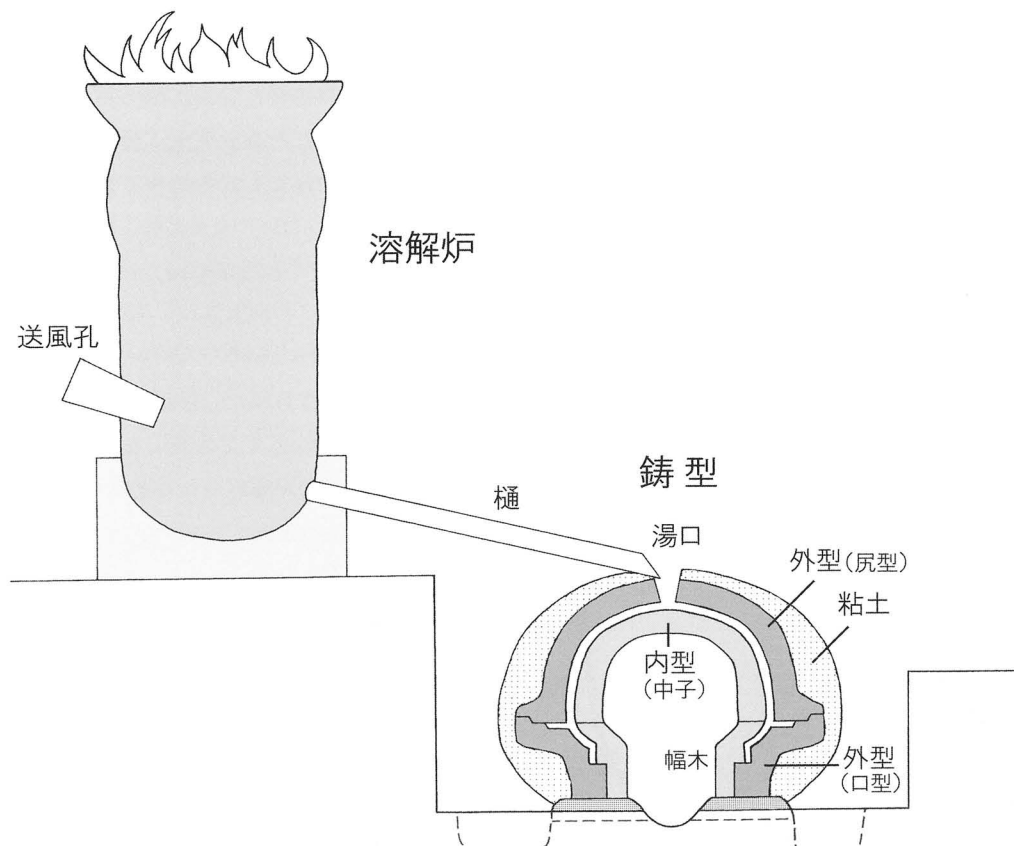


Fig.26 鉄釜鑄造作業復原模式図

下半の鋳型は細片化著しいが、おそらく復原図に示したように丸底を呈するのであろう。中近世の羽釜は鏝が胴の最大部に付き通例であるが、今回復原した鉄釜はやや上位に鏝がつく点に特徴がある。

鉄は腐蝕しやすいために、古代の鉄釜の出土例は極端に少なく、伝世品も存在しない。鉄釜鋳型の出土例としては、9世紀代を中心とした鋳型が、滋賀県栗東市中村遺跡や富山県射水郡小杉町綿打池遺跡・同町上野ⅡB遺跡、富山市三熊内山遺跡、福島県相馬郡新地町向田A遺跡で出土しているが、今回のような大型品と形状を比較できる資料はない。一方、伝存品としては和歌山県本宮大社の建久9年(1198)銘の鉄釜が最も古い(五十川伸矢「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集、1992年)。この鉄釜は大きさが今回の出土品に近く、古代から中世への鉄釜の形態変化を知ることができる。

**古代寺院と鉄釜** 古代寺院が多くの鉄釜を所有したことは、天平時代の資財帳に散見される。例えば法隆寺では「合釜壹拾肆口」があり、その内訳は「温室分銅壹口」と「通分鉄壹拾叁口」であった。また大安寺には「合釜參拾叁口」があり、その内訳は「銅十口」と「鉄廿二口之中七口在足並通物」、「鉄一口温室分」であった。このように古代寺院は、数多くの銅・鉄製の釜を所有し、「温室」用の湯釜や調理に用いていた。当地で鑄造された鉄釜は、その法量からみて川原寺の湯釜であった可能性もあろう。

**川原寺瓦窯の発見** これまで川原寺創建期の瓦窯として知られていたのは五條市西河内に所在する荒坂瓦窯が唯一のものであったが、新たに川原寺の寺域内にも創建期の瓦窯が存在することが判明した。調査は焚口の一部にとどまったが、調査区南方の丘陵斜面にも瓦の出土する地点があり、今回川原寺瓦窯と命名した瓦窯の規模や構

造の究明が、今後の大きな課題となった。

**下層遺構について** 調査区北部で発見した下層の石敷遺構は、これまで寺域内の各所で確認されている下層遺構との関係が問題となる。下層遺構はこれまでに、西金堂周辺で検出した石敷や石組暗渠(『報告』)、今回の調査区の南80mの地点で確認した石列と石敷舗装(『藤原概報20』)などがあり、川原寺前身の川原宮との関係が推測されている。今回検出した下層石敷遺構の年代は、直上に堆積する土器溜りSX650出土土器の年代が鍵を握るが、それは飛鳥Ⅰを主体とした土器群であった。したがって川原宮に直接関連した遺構である可能性は低い。飛鳥京の対岸に位置する一等地が空閑地であったとは考えられず、周辺に飛鳥京の関連施設が存在したと考えるべきであろう。性格の解明を将来に待ちたい。

#### E 寺域北辺施設の性格

古代寺院は、伽藍地を中心に、大衆院、倉垣院、花園院、苑院、修理院、温室院、賤院など、宗教活動を支える寺院運営上の諸施設で構成されていた。今回発見した寺域北辺の遺構群は、造営時に営まれた冶金関連工房を母胎に、造営後にも継続的に冶金関連の炉跡が営まれるなど、川原寺の造営と営繕に関わる付属工房の一部と考えられる。こうした冶金関連工房が寺域の北部に存在する例は、他の寺院でも比較的多く認められるところであり(杉山洋「寺院付属の金属関係工房」『仏教芸術』148号、1983年)、長和の『薬師寺縁起』に記された平城京薬師寺の「修理温室院」の配置状況にも符合するなど(福山敏男『寺院建築史の研究』1982年)、寺域の空間利用を考える上で興味深い事実が得られた。寺域の空間利用の解明作業は、今後の寺院調査の重要な課題であり、目的意識をもった発掘調査の必要性が痛感されるところである。

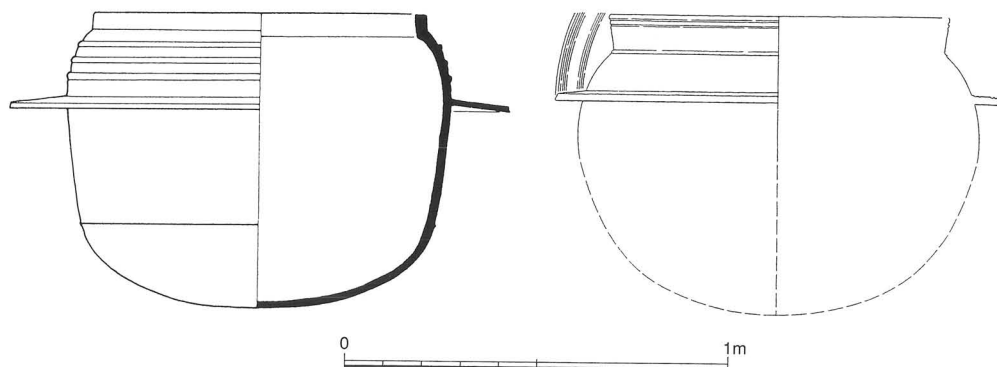


Fig.27 建久九年銘和歌山県本宮大社の鉄釜(左)と川原寺鉄釜復原図